



A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

10

C・ブロンテ

ジェイン・エア 河野一郎訳

中央公論社

C・ブロンテ

訳者 河野一郎

JANE EYRE illustrated by Fritz Eichenberg
Copyrighted by Random House.
The Japanese right arranged through
Charles E. Tuttle Co., Inc., Tokyo.

昭和43年9月1日初版印刷
昭和43年9月10日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 矢嶋製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

ジ
エ
イ
ン
・
エ
ア

目
次

年 解
譜 説

550

524

3

ジ
エ
イ
ン
・
エ
ア

その日は、とても散歩などできそうになかった。もつとも、朝のうち一時間ばかり、葉の落ちた灌木のあいだを歩きまわったが、昼食がすむころから（リード伯母は、客のないときには早目に昼食にしたので）冷たい冬の風が黒ずんだ雲を呼び、肌にしみ入る雨を降らせはじめ、とてもこれ以上、戸外での運動はできなくなってしまうた。

わたしはうれしかった——長い散歩は、とくに寒い午後の散歩は、きらいだったからだ。手足の指先までかじかみ、乳母のベッシーのおごとにしよげ返り、イライザやジョンやジョージアナ・リードにくらべ、体力の劣っていることを思い知らされ、小さくなって、うすら寒い日暮れに家へ帰ってくるのはたまらなかった。

そのイライザと、ジョンと、ジョージアナは、いま客間で彼らの母親のまわりをかこんでいた。母親は暖炉のそばのソファにもたれ、（このときばかりは、けんかもせず泣き声も立てていない）かわいい子どもたちに取りま

かれて、いかにもしあわせそうに見えた。しかしわたしのことは、こう言つて仲間に入れてくれないのだ——「ジェインを遠ざけておかなきゃならないのは残念だけど、あの子がもつと愛嬌のある、子どもらしい性質を身につけ、もつとかわいく元気の良い態度をとり、もつと明るくすなおな、いわば飾り気のない子になろうと本気で心がけていることを、ベッシーから聞くなりあたし自身が目で確かめるまでは、不満のない、しあわせな子どもたちだけに与えられる特権からのけておかなくては」

「ベッシーは、あたしが何をしたらって言いますの？」とわたしは訊いた。

「ジェイン、伯母さんはね、りくつをこねたり、うるさく訊いたりする子は大きらいなの。それに、子どものくせにそんなふうにおとなに食つてかかるなんて、とんでもないことです。どこかあっちへ行つてすわつておいで。もつとまともな口が利けるようになるまで、おとなしくしてなさい」

小さな朝食用の食堂が、客間にとり合っていた。わたしはそつと食堂へはいった。そこには本棚があつた。わたしはさつそく、たくさん挿絵のはいつた一冊の本をえらび、手に取つた。そして、窓下の腰掛に上がりこむと、トルコ人のようにあぐらをかいてすわり、赤い毛織りのカーテンをほとんどいっばいに引き、二重の隠れ家

に身を隠した。

右手のほうは、赤いカーテンの襷にさえぎられていたが、左側には透明なガラス窓で、窓がうら悲しい十一月の空模様からわたしを守ってくれていたが、完全に切り離されているわけではなかった。ときどき、本のページをめくりながら、わたしは冬の午後のたたずまいに目をやった。遠くは霧と雲に青白くかすみ、近くはぬれた芝生と嵐に打たれた灌木となり、長い悲しげな疾風にあられた小止みなく降る雨が、はげしく吹きつけていた。

わたしは本にもどった——読んでいたのは、ビューイックの『英国鳥禽史』だった。総じて、本文の説明には興味がなかったが、子どもながらも見すごすことのできない前書きのページがあった。そこには、海鳥の棲息地のことや、海鳥だけが住んでいる「淋しい岩山や岬」、最南端のランドネスないしはネーズから、北の岬にいたる、小さな島の点在するノールウェイ海岸のことなどが書かれていた——

そこでは巨大な渦を巻く北海が

さいはてのあらわな淋しい島々を洗い

大西洋の大波は嵐の吹きつける

ヘブリデスの島々のあいだに注がれる

またわたしには、ラップランドや、シベリア、スピッツベルゲン、ノーヴァヤ・ゼムリヤ、アイスランド、グリーンランドなどの、荒涼とした海岸線を描いた説明も見のがせなかった——「北極圏の広大な氷原、わびしい空間の荒涼たる地域——雪と氷の貯蔵地、そこでは何世紀にもわたる冬の積み上げた堅い氷原が、アルプスの山を重ねたほどにそそり立ち、極地を取りかこみ、極寒の何倍ものきびしい寒気を一点に集めている」こうした死のように白い地方について、わたしにはわたしなりの考えがあった。子どもごろころにぼんやりと浮かぶ、半ば理解のゆかぬさまざまな考えとおなじように、漠然としたものではあったが、それは奇妙に印象的だった。この前書きのページに書かれた文句は、あとの挿絵と関連しており、大波と飛沫の海にただ一つそそり立つ岩や、淋しい海岸に打ち上げられた難破船や、沈みかけている難破船を雲間からのぞいている冷たい無気味な月などに、重みをそえていた。

墓碑銘をきざんだ墓石があり、門と二本の木と、こわれた塀にかこまれた低い地平線、そして夕暮れ時を示すのぼったばかりの三日月のかかる静かな淋しい墓地——その絵にどんな感情がまつわっていたか、わたしにはわからない。

風の絶えた海上で、動けなくなった二隻の船の絵を、



わたしは海の幽霊だと思った。

悪魔が、盗賊の背負った包みを後ろから押えている絵は、いそいでめくってしまった——とてもおそろしくてならなかったのだ。

角のある黒い怪物が、岩の上に腰をおろし、絞首台をかこんで集まった遠くの群衆を眺めている絵も、おそろしかった。

どの絵にもそれぞれの物語があった。わたしの未熟な理解力と未完成な感情には、不可解なことが多かったが、それでもどんなにか興味をそそられた。ちょうど冬の夜、ベッシーが機嫌のよいときに聞かせてくれるお話のように、おもしろかったのだ。ベッシーはそんなとき、子ども部屋の炉端へ火のし台を持ちこみ、そのまわりにわたしたちをすわらせ、リード伯母のレースの縁飾りの襷を仕上げたり、ナイトキャップの縁にこてをかけたたりしながら、古いお伽話やむかしの民話、あるいはまた（これは後になって知ったことだが）、『パメラ』や『モアランド伯爵ヘンリー』などから取った恋物語や冒険談を、一心に耳を傾けているわたしたちに語って聞かせてくれたものだ。

ビュイックの著書を膝の上へおせて、そのときのわたしはしあわせな——わたしなりにしあわせな、気分だった。わたしはただ、邪魔のはいることだけをおそれて

いたが、その邪魔はあまりにも早くやってきた。朝食室のドアがあいたのだ。

「やい！ ふさぎ虫！」ジョン・リードの声だった。そのあと、ちよつと間があった。部屋にだれもいないと思ったのだ。

「どこへ行きやがったんだろ？ イライザ！ ジョージアナ！（と妹たちを呼んで）ジェインのやつ、ここにはいないよ。ママに、ジェインは雨の中へとび出して行っちゃって言いつけてやれよ——ほんとにしようのないやつなんだから！」

「カーテンを引いておいてよかったわ！」とわたしは思った。この隠れ場所が見つかりませんように、とわたしは心から願った。どのみち、ジョン・リードに捜し出される気づかいにはなかった——目も勘もすばやいほうではなかったからだ。ところが、そのときイライザが戸口に顔を出すなり言った——

「きつと、窓のところにいるわよ、ジョン」

わたしはすぐさま自分から出て行つた。ジョンに引きずり出されると思うと、おそろしくてならなかったからだ。

「何かご用？」と、わたしはおずおずと訊いた。

「何かご用でございませうか、坊っちゃん——と言うんだ。こっちへこい」彼は肘掛椅子にすわると、こちらへ来て

前に立てという身ぶりをした。

ジョン・リードは十四歳になる生徒で、十歳のわたしよりは四つ年上だった。年のわりには大柄で肥っており、くすんだ不健康な肌をして、大きな顔にぼってりした目鼻がつき、手足も太く指先までずんぐりした感じだった。食卓ではきまって大食いをしたため、気むずかしい性質になり、かすんだ生氣のない目をし、頬もたるんでいた。今もとうぜん学校へ行ってなければならぬはずだったが、「蒲柳（ハナヤナギ）のたちだから」という理由で、母親が家へつれ帰ってもう一、二ヵ月になった。学校のマイルズ先生は、家から送ってくるキーキや砂糖菓子の量さえ減れば、健康のほうは大丈夫だと断言していたが、母親の心はそのようなきびしい意見は聞くに耐えず、この子の血色の悪いのは勉強のしすぎと、家恋しさのためだということ、もつと人聞きのよい意見に傾いていた。

ジョンは、自分の母親や妹たちにもあまり愛情を持たず、わたしには反感を持っていた。わたしを見ればいばり散らし、ひどい目にあわせるのだが、それも週に二、三度、日に二、三回ではなく、ひっきりなしなのだ。わたしの全身の神経は彼をおそれ、彼がそばへくると、骨についた肉のことごとくがちぢみ上がるのだ。彼のかき立てる恐怖に、どうしてよいかわからなくなることもしばしばだった——おどされても、痛い目にあわされても、

訴えて行きようがなかったからだ。召使たちは、わたしの肩を持って坊つちやまの機嫌をそこねたくなかったし、リード伯母は、この問題ではめくらでつんばも同然だった。ジョンが母親の目の前でときおり、かげではもっとしばしば、わたしを叩たたこうがののしろうが、伯母にはまるで見えも聞こえもしなかったのだ。

いつものように従順に、わたしはジョンの椅子の前へ行った。彼はつけ根を痛めぬていどに、三分間ほどわたしに向かつて、思いきり舌をつき出した。すぐにも殴りつけてくることはわかっていたので、それをおそれながらも、わたしはやがて拳こぶしをふり上げてくる彼の、胸の悪くなるような醜い顔をつくづくと眺めた。そのころをわたしの顔に読み取ったのか、彼はいきなり物も言わず、力いっぱいわたしを殴った。わたしはよろめき、ころぶまいとして一、二歩彼の椅子から後ろへさがった。

「今のは、さっきママに生意気に口答えしたのと、カーテンのうしろへなんかこそそこをかくれたのと、今したにくらしい目つきの罰だと思え、この野郎！」

ジョン・リードの悪口には慣れていたもので、口答えしようと思ったこともなかった。わたしの心配は、ののしりの後にならずくる一撃を、どうやってこらえようかということだった。

「カーテンのかげで何してたんだ？」と彼は訊いた。

「本を読んでいたの」

「本を見せろ」

わたしは窓のところへゆき、本を取ってきた。

「うちの本を勝手に持ち出していいのか。おまえは居候^{きこう}なんだって、ママが言ってるぞ。おまえは一文なしなんだ。おまえのお父さんは、何にも金を残してかなかったんだ。おまえはほんとなら、乞食^{こじき}をしてるところなんだ。ほくらみたいな紳士の子どもといっしょに暮らして、ほくらとおんなじ物を食べ、うちのママのお金で服を着せてもらったりできるはずはないんだ。いいか、ほくの本棚をかきまわすと、どんな目にあうか今見せてやる——本はみんなほくの物なんだぞ。この家じゅうの物はみんなほくの物なんだ、いずれ何年かしたらそうなるんだ。さあ、鏡と窓をよけて、ドアのそばへ行って立ってろ」

はじめのうち、彼の意図がわからず、わたしは言われたとおりにした。しかし、彼が本をふりかざし、投げつけようとするのを見たたん、わたしは悲鳴をあげ、本能的に身をかわした。しかし、手遅れだった。飛んできた本が当たり、わたしは倒れ、頭をドアに打ちつけて傷ついてしまった。傷口からは血が流れ、痛みもひどかった。しかし、わたしの恐怖はすでに峠を越し、さまざまな感情がこみ上げてきた。

「いじわる！ あんたなんか人殺しみたい——奴隷の監督よ——ローマの皇帝そっくりだわ！」

わたしはゴールドスミスの『ローマ史』を読んだことがあり、ネロや、カリギュラやその他の暴君について、わたしなりの考えを持っていた。またひそかに、ジョンを暴君たちになぞらえたりもしていたが、こんなにはつきり声に出して言おうとは、自分でも思っていなかった。「なに？ 何だって！ ほくに向かつてよくも言ったな。今の言葉を聞いたかい、イライザにジョージアナ？ そうとも、ママに言いつけてやるから。だけど、その前に——」

ジョンはいきなり、わたしにとびかかってきた。髪の毛と肩をつかまれたのを覚えているが、わたしも必死だった。わたしはほんとうに彼の中に暴君を見、人殺しを見ていた。血が一滴二滴、頭から首筋をつたうのを感じ、何かびりびりする痛みを覚えた。そのため一時おそろしさも忘れ、わたしは気違いのように歯向かって行った。両手で何をしたのか自分でもよくはわからないが、彼は「この野郎！ この野郎！」と叫び、大声でわめき立てた。援軍はすぐそばにいた——二階にいるリード伯母を呼びに、すでにイライザとジョージアナは駆け出しており、伯母がベッシーと小間使のアボットを従えて、現われたのだ。わたしたちは引き分けられた。わたしにはこ

んな声が聞こえた——

「まあ！ まあ！ 坊っちゃまにとびかかるなんて、気違いさただわ！」

「こんな乱暴ってあるかしら！」

リード伯母も加わった——

「この子を赤い部屋へつれて行って、鍵をかけておしまい」四本の手がすぐさまわたしを取りおさえ、わたしは二階へつれて行かれた。

二

わたしはずつと抵抗しつづけた。こんなことはわたしもはじめてだったが、おかげでわたしのことを悪くとうとしていくベッシーやアボットの気持ちに、ますます油をそそぐ結果になってしまった。実のところ、わたしはいくらか気が変になっていた。フランス人の言い方を借りるならば、いわば「自分の外にあった」のだ。先ほどのちよつとした反抗で、すでに無気味な罰を受けねばならぬことを知っていたので、もうやぶれかぶれになっていたわたしは、反逆をくわだてる奴隷さながら、とことんまで反抗してみる決心をした。

「アボットさん、この子の肩をおさえててちょうだい。まるで気違い猫だわ」

「ほんとにまあ、あきれたったら！」と小間使のアボッ

トは叫んだ。「ひどいことをするじゃありませんの、エアさん、恩人の坊っちゃまを殴るなんて！ あなたの若いご主人なんですよ」

「ご主人？ なんてあの子が、あたしの主人なの？ あたしは召使なの？」

「いいえ、あなたは召使以下なんですよ。何も仕事もせずに、食べたり着たりさせてもらってるんだから。さ、すわって、自分の悪かったことをよく考えてごらん」

すでにわたしは、リード伯母の言った部屋へつれてこられ、椅子の上へむりやりすわらされていた。わたしはとつさに、ねのように飛び上がろうとしたが、二人の手にすぐさま押えつけられてしまった。

「おとなしくすわってないと、縛りつけますよ」とベッシーが言った。「アボットさん、あなたの靴下どめを貸してちょうだい。あたしのはすぐに切られてしまいそうだから」

アボットは向こうをむき、太い脚から靴下どめをはずしにかかった。こうして縛る道具が準備され、またこの上に恥辱が加えられるかと思うと、わたしの興奮もいくらか静まった。

「そんなもの取らないで。もうあばれないから」とわたしは叫んだ。

その証拠に、わたしは両手で腰掛にしがみついた。

「きつと動くんじゃないのよ」とベッシーは言った。そして、わたしがほんとにおとなしくなったのを見きわめてから、押えていた手を放した。それから、アボットと二人で、腕組みをしたまま、わたしの正気なのが信じられないというように、わたしの顔をけわしい疑いの目で見つめた。

「今までこんなことはなかったんだけどねえ」と、やつとベッシーは小間使のほうを向いて言った。

「だけど、前からその素質はあるのよ」という答えだった。「あたし何度も奥さまに、この子のことで意見を申し上げたの、奥さまも同じ考えだったわ。ちっちゃいくせに陰險な子だからねえ。こんな年ごろで、こんな猫つかぶりは見たことないわ」

ベッシーは答えなかったが、やがてわたしに向かって言った――

「お嬢さん、あなたはね、奥さまのご厄介になつてることを忘れちゃいけないのよ。奥さまのおかげで暮らせてるんだから。もしここを放り出されたら、救貧院へ行かなきゃならないのよ」

こう言われては、言葉が返せなかった。今はじめて聞く言葉ではなかった――物心ついて以来、似たようなことをさんざん言われてきたからだ。居候だという非難は、わたしの耳にはぼんやりと聞こえる単調な唄になつてい

た。ひどくつらい、胸の痛む言葉ではあったが、その意味はまだよくわからなかったのだ。アボットも、ここぞと口をはさんだ――

「だからね、奥さまがご親切に、お嬢ちゃま坊っちゃまといっしょに育ててくださったからって、対等の身分だなんて考えちゃとんでもないこと。坊っちゃまがたには財産がどつさりあるだろうけど、あなたにはないんだから。頭を下げて、皆さんの氣に入られるようにするのが、あなたのつとめなのよ」

「あたしたちはね、あなたのためを思って言つてるのよ」とベッシーがおだやかな声でつけ加えた――「はがらかで役に立つように心がけなければだめよ、そうすれば、ここも居心地のいい家になるでしょうけど、かんしやくを起こして乱暴なまねをしりしたら、きつと奥さまに追い出されてしまうわ」

「それに、そんな子には神様の罰があたるわ」とアボットが言った。「かんしやくを起こしている最中に、神様に打ち殺されてしまうかもしれない。そしたら、その子の行き先は地獄しかないってことね。さあ、ベッシー、おいといて行きましょう。何をやるからと言われても、この子のような性質だけはまっぴらだわ。エアさん、ひとりになったらお祈りをなさい――悔い改めないと、おそろしいものが煙突からおりてきて、あなたをかつさら

つてゆくかもしれないわよ」

二人はドアをしめ、出たあと鍵をおろして行つてしまつた。

赤い部屋は、めつたに寝室には使われぬ空き部屋だつた。まつたく使われぬ部屋だつたと言つてもよい——たまたま一度におおぜいの客が押し寄せ、部屋という部屋をすべて用立てねばならないときをのぞいては。しかし、この屋敷ではいちばん大きく、いちばんりっぱな部屋の一つだつた。マホガニーのがつしりした柱に支えられ、深紅の緞子のカーテンのかかつた寝台が、部屋の真ん中に神殿のようにすえられていた。いつも鎧戸のおろされた二つの大きな窓も、おなじ手のカーテンの花綵や垂れ飾りに半ばおおわれていた。絨毯も赤かつた。寝台の足元にあるテーブルにも、深紅の布がかかつていた。壁は薄紅色のまじつた淡い鹿毛色で、たんすも化粧台も椅子も、黒々と磨きこまれた古いマホガニー材でできていた。こうしたまわりの濃い影の中からくつきりと浮き上がり、白く光つて見えるのは、純白のマルセイユ織りの上掛けをかけられいくつも積まれた、マットレスと枕だつた。寝台の枕元近くにおかれた、クッションのついた大きな安楽椅子も純白で、寝台におとらずきわ立つて見えた。足台を前においたその椅子は、わたしには青白い玉座のように見えた。

めつたに火を焚かぬため、部屋はひえびえとしていた。子ども部屋や台所から遠く離れているので、ひっそりと静まり、めつたに人もはいらぬため、神聖な感じがした。ただ土曜日ごとに、鏡や家具に静かにもつた一週間分のほこりを払いに女中がやってくるのと、ほんのときたまリード伯母が、たんすの秘密の引出しの中味を調べにくるだけであつた。引出しの中には、さまざまな書類や、宝石箱や、亡くなった夫の小さな肖像画などがしまつてあつた。この亡くなった夫という言葉の中に、この寝室の秘密が——りっぱな部屋にもかかわらず、ひどく淋しい感じを与えている魔力が、ひそんでいた。

リード伯父が亡くなつてから、もう九年になつた。伯父が最後の息を引き取つたのは、この部屋だつた。遺体はここに安置され、柩はここから葬儀屋によつて運び出されたのだ。そしてその日以来、悲しい聖別の思い出が、家人の足をこの部屋から遠のかせていた。

ベッシーと意地のわるいアボットが、わたしをわりやりすわらせて行つた椅子は、大理石の炉棚のそばの低いソファで、寝台は目の前に高くそびえ、右手には丈の高い黒っぽいたんすがあり、やわらかな、とぎれとぎれの反射が、鏡板の光沢をさまざまに変えていた。左手にはカーテンを引いた窓があり、たんすと窓のあいだに置かれた大きな姿見は、寝台と部屋のがらんとした莊重さを

映していた。あの二人が、ほんとうに鍵をかけて行ったかどうかよくわからなかったので、やっと身動きするだけの勇氣が出ると、わたしは立ち上がり、見に行ってみた。ああ！ 鍵はかかっていた——これほど莊重な牢獄もなかったであろう。戸口からもどるのには、どうしても姿見の前を通らねばならなかった。思わず惹きつけられたように、わたしは鏡の奥底をのぞきこんでみた。その空ろな幻影の世界では、すべてが現実よりも冷ややかに黒ずんで見え、青白い顔と腕を暗がりに浮き上がらせ、他のすべてが静まっている中で、きらきら輝く恐怖の目だけを動かし、じっとわたしを見つめている鏡の中の奇妙な小さな姿は、ほんとうの幽霊のように思えた。羊歯におおわれた淋しい荒野の谷間から、行き暮れた旅人の目の前に現われるという、ベッシーの夜話に出てくる半ば妖精、半ば小鬼の小さなお化けのような気がした。わたしは椅子へもどった。

わたしは迷信におびやかされていた。しかしまだ、完全に支配されていたわけではなかった。わたしの血はいぜんとして熱く、謀叛を起こした奴隷の気分は、まだ力強くわたしを支えていた。この陰鬱な現在におじける前に、わたしはどつとよみがえってくる過去の思い出をせきとめねばならなかった。

ジョン・リードから受けたかずかずの暴虐、妹たちの

高慢な冷淡さ、その母親の憎しみ、召使たちのえこひいきなどが、濁った井戸のどす黒い沈澱物をかきまわしたように、わたしの乱れた心の中にわき上がってきた。なぜわたしは、いつも苦しみ、いつもおどされ、いつも責められ、いつもとがめられねばならないのだろうか？ どうしてわたしは、人の氣に入れないのだろうか？ どうしてかわいがられようと努力してもだめなのだろうか？

強情でわがままなイライザは、尊敬されている。とげとげしく意地わるで、人のあけ足取りばかりをする、横柄なだっ子のジョージアナは、みんなからちやほやされている。彼女の美しさ、桜色の頬や金色の巻き毛は、見るものすべてに喜びを与え、どんなあやまちも許されてしまふようだった。ジョンときた日には、鳩の首をひねろうが、小さな孔雀の雛を殺そうが、羊に犬をけしかけようが、温室のぶどうの実をもごうが、温室でいちばん大事な草花の蕾を折り取ろうが、だれひとりとがめる者はなく、ましてや叱る者はなかった。自分の母親を「うちのばあさん」と呼び、ときには自分とおなじ母親の浅黒い肌を悪しざまに言い、母親の命令をそっけなく無視し、母親の絹服を引き裂き台なしにしてしまふことも、めずらしくはなかった。それでも彼は、いぜんとして母親の「かわいい坊や」だった。わたしは過失一つおかすわけにゆかなかった。あらゆる義務を果たすように心が